

The Magazine for Funeral Service

SOGI

通巻134号 MARCH
2013 VOL.23 NO.2



表現文化社

「看取りの文化」を、 地域に取り戻すために

医師・長尾和宏

構成・文 = 萬野裕彦

（昨年夏、延命治療について書かれた一冊の本がベストセラーになった。タイトルは『平穏死』10の条件』。著者は兵庫県尼崎市の開業医、長尾和宏さん。目次を見ると、「平穏死」のための条件として挙げられた10項目の中に「勇気を出して葬儀屋さんと話してみよう」という項目がある。医師の著書で「葬儀屋」が登場するものにはこれまで出会ったことがない。尼崎の下町の一角にある「長尾クリニック」に院長の長尾さんを訪ね、話をうかがつた）

「平穏死」とは「自然死」や「尊厳死」と同義語と考えてください。終末期に延命治療を行わずに自然な経過に委ねるということですね。その結果として寿命も延び、苦痛も少なく、穏やかな最期を迎えるということです。でも、これは今の日本の医学界の常識とはまったく逆のことを言っています。

ほとんどのお医者さんや看護師さんは平穏死を知らないですし、まったく信じていない。

不思議なことに一般の方々のほうが理解されているんですね。平穏死について講演をしても、一般市民の皆さんはどうなずいて聞いてくれます。けれども、お医者さんたちに同じ話をしても、みんな首をかしげている。天動説時代に、地動説を唱えているような状況です。医療者に受け入れてもらえない。今、そこが一番ネットになっているんです。

（平穏死）

「平穏死」という言葉をつくったのは石飛先生です。でも、そういう死があるということは我々も経験的には知っています。在宅医療に携わる人は、みんなうすうす気がついています。平穏死はブームではありません。紛れもない真実なんです。

僕は勤務医だった時代に5百人以上の患者さんの最期に立ち会つてきました。さらに開業医になって在宅で看取つた人は5百人を超みました。それでわかつたことは、勤務医時代に病院で延命治療をした5百人と、在宅での5百人は、もうまったく違う世界だということ。

（すでに知られているとおり、日本人にとって「最期の場所」は、いつの間にか自宅から病院に移つた。かつては8割の人が自宅で亡くなつていたが、1976年頃を境に病院死の人数が在宅死のそれを上回り、今では約8割の人が病院で最期を迎えている。この逆転現象を長尾さんは「死の外注化」という言葉でとらえる）

今は死を病院に外注してしまったわけですね。1976年までは在宅死のほうが多かつたですから、家族にとって死は自分たちの家で起きる問題だったわけです。自分たちが当事者だった。

（平穏死ブーム）と言われているが、現在で題名に「平穏死」という言葉が入った本を書いているのは、石飛幸三氏（『平穏死のすすめ』）と長尾さんの2人だけ。

「石飛先生は、僕にとって生涯忘れられない先輩」と長尾さんは言つ。

石飛氏は病院の院長を務めた後に特養ホームの常勤医になり、過剰な延命治療をしないことが安らかな看取りにつながることを発見し、それを「平穏死」と命名した。その問題提起が、長尾さんの本の出版にもつながつた。

臨終の場面で僕が思い出すのは、患者

さんの苦悶の表情ばかりです。でもそ

の頃は僕も「治療」で患者さんの命を

「延ばす」ことが、医者の使命だと思つていました。それが患者さんを苦しめていたことに、もつと早く気がつけばよかつたと、今は懺悔の気持ちでいっぱいです。

今、病院で終末期の患者に行われて

いることは犯罪に等しいと僕は思いました。医療は人を楽にするためにあるのを苦しめている。それに医療者自身が

気がついていない。憂うべき事態だと

思いますね。僕はそれを告発している

わけです。まず平穏死という真実を知つていただきたいし、信じていただきたい。

（すでに知られているとおり、日本人にとって「最期の場所」は、いつの間にか自宅から病院に移つた。かつては8割の人が自宅で亡くなつていたが、1976年頃を境に病院死の人数が在宅死のそれを上回り、今では約8割の人が病院で最期を迎えている。この逆転現象を長尾さんは「死の外注化」という言葉でとらえる）

今は死を病院に外注してしまったわけですね。1976年までは在宅死のほうが多かつたですから、家族にとって死は自分たちの家で起きる問題だったわけです。自分たちが当事者だった。

なつていく人が呼吸器とか点滴とか胃

ろうとかのいろんな管まみれになつて

いるのを、家族は外から眺めて、時々

文句をつけたりしている。おかしなこ

とですよ。

そもそも看取りという言葉の中には、

主体性というか、自分が関わるという

ことが含まれていると思うんです。家

族が「病院で看取った」とはあまり

言わないでしょ。「病院で亡くなつた

という言い方をする。死を人に委ねて

いるから、自分は関係ないような、他

人事みたいな言い方になる。

自宅の場合には「家で看取った」と言

いますね。自分が一人称として関わる。

病院の死は三人称の死です。でも自宅

の看取りは自分が関わる。自宅の場合

は死の主体化、病院の場合は死の客体

化とも言えます。

かつては「看取りの文化」と言える

ものが日本にはあつたと思うのですが、

それはもう1976年を境になくなつてしまつたわけですね。その後、死は

とにかく忌み嫌うべきものになつてしまつた。

家族が自宅で亡くなつたら、自宅の

価値が下がると怒る人もいるん

ですよ。死者が出た家だということで、

売る時に高く売れなくなると言つてね。今の日本はそういう文化になつちゃつ

たんですね。

医療業界と葬儀業界の交流を

儀業界の交流の希薄さを、問題意識として
もつよくなつた)

これからは死を地域の中に取り戻す時代だと思います。僕は「地域における看取りの文化の再興」という言葉を使うんですけども、死は別に忌み嫌うべきものではなく、穏やかな最期、

平穏死というものがあつて、その果てに旅立ちがある。それは病院という特殊な遠い白い巨塔の中にあるのではなく、住み慣れた地域に、自然な形である。そういうことを各地域で考えていくべきです。

僕は7~8年前から「生と死を考える市民フォーラム」というのを開催しているんですが、必ず葬儀屋さんにも来てもらつて、講演してもらつんです。すると僕らの知らないことがいっぱいあるし、葬儀屋さんも逆に僕らの話を聞いてびっくりすることが多くあります。

また、僕らが患者さんの葬儀に行くこともあります。そこでもいろいろなことを学ばせてもらいますしね。お互に学ばないといけないと思います。



●ながら・かずひろ

1958年香川県生まれ。1984年東京医科大学卒業、大阪大学第二内科入局。大阪大学病院勤務等を経て、95年兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業、外来診療と在宅医療に従事。

医学博士、日本慢性期医療協会理事、日本ホスピス在宅ケア研究会理事、日本尊厳死協会副理事長、医療法人社団裕和会理事長、関西国際大学客員教授など。

著書『平穏死10の条件』、『胃ろうという選択、しない選択』、『平穏死』という親孝行など多数。

僕は医者こそ、一回はお棺の中に入つてみないといけないと思うんですよ。

胃力メラを使つて医者は一回は必ず胃力メラを受けますし、他のいろんな検診でもそうです。ですから看取りをする

医者は、せめてお棺の中ぐらい入つてみて、どんな感じなのか必ず体感すべきです。僕は入つことがありますけど、やっぱり横から見ているのと実際に入ることでは全然違う。

葬儀業界の方にはもつとどんどん医療業界に入つてきてほしい。医療業界の中からはなかなかそういう芽は出でこないです。まず医療業界と葬儀業界がしつかり交流すれば、そこにお坊さんも入つて来やすくなつたりと、宗教界も含めた人的交流ができるいくと思う。それが看取りの文化の再興ということにもつながると思います。(談)

なつていく人が呼吸器とか点滴とか胃

ろうとかのいろんな管まみれになつて

いるのを、家族は外から眺めて、時々

文句をつけたりしている。おかしなこ

とですよ。

そもそも看取りという言葉の中には、

主体性というか、自分が関わるという

ことが含まれていると思うんです。家

族が「病院で看取った」とはあまり

言わないでしょ。「病院で亡くなつた

という言い方をする。死を人に委ねて

いるから、自分は関係ないような、他

人事みたいな言い方になる。

自宅の場合には「家で看取った」と言

いますね。自分が一人称として関わる。

病院の死は三人称の死です。でも自宅

の看取りは自分が関わる。自宅の場合

は死の主体化、病院の場合は死の客体

化とも言えます。

かつては「看取りの文化」と言える

ものが日本にはあつたと思うのですが、

それはもう1976年を境になくなつてしまつたわけですね。その後、死は

とにかく忌み嫌うべきものになつてしまつた。

家族が自宅で亡くなつたら、自宅の

価値が下がると怒る人もいるん

ですよ。死者が出た家だということで、

売る時に高く売れなくなると言つてね。今の日本はそういう文化になつちゃつ

たんですね。

医療業界と葬儀業界の交流を

儀業界の交流の希薄さを、問題意識として
もつよくなつた)

今は医療業界と葬儀業界は全然離れていますけれど、死んだ途端に業界が連続していないというのも変な話です。生と死は連続しているんだから、本当は接点がなかつたらおかしいはずなんです。

僕は7~8年前から「生と死を考える市民フォーラム」というのを開催しているんですが、必ず葬儀屋さんにも来てもらつて、講演してもらつんです。本当に接点がなかつたらおかしいはずなんです。

僕は7~8年前から「生と死を考える市民フォーラム」というのを開催しているんですが、必ず葬儀屋さんにも来てもらつて、講演してもらつんです。すると僕らの知らないことがいっぱいあるし、葬儀屋さんも逆に僕らの話を聞いてびっくりすることが多くあります。

僕は7~8年前から「生と死を考える市民フォーラム」というのを開催しているんですが、必ず葬儀屋さんにも来てもらつて、講演してもらつんです。すると僕らの知らないことがいっぱいあるし、葬儀屋さんも逆に僕らの話を聞いてびっくりすることが多くあります。